

While the Sun Shines に見る喜劇の諸相

—その時事性と普遍性を中心として—

中村 愛人

(1999年9月30日受理)

Some Aspects of a Comedy in *While the Sun Shines*: Their Topicality and Universality

Yoshito Nakamura

Terence Rattigan began his career as a writer of popular middle class light comedies. *While the Sun Shines* (1943), one of his early plays, was his second big success of those light comedies. It enjoyed, it is told, a London run of more than one thousand performances. It is a play full of scenes where we can laugh at and enjoy witty conversations of characters. There is a remark, however, that those witty conversations of characters depend too much on allusions to current topics of those days, that is, the Second World War and life in wartime London.

It is the aim of this paper to examine whether we can sufficiently appreciate the play with a little background knowledge of the war and life in wartime London. We also examine some other features of the play both as a comedy and a farce.

I. はじめに

ラティガン (Terence Rattigan) が、第二次大戦中の1943年に発表した *While the Sun Shines* は、7年前の作品 *French Without Tears* (1936) と同様のヒットとなって千回以上のロングランを続ける。¹⁾ この時期の作家は、この2作品に代表されるように、とりわけ喜劇的な才能を発揮して人気を博したが、批評家たちの評価はあまり芳しくなかった。

作家の作品を、いわゆる真面目な劇 (serious drama) と軽い喜劇 (light comedy) に分ける時、勿論この作品は後者に入るものであるが、更に笑劇 (farce) と見做されることもある。²⁾ “a farce, *While the Sun Shines* (1943), and a light comedy, *Love in Idleness* (1944), both successes in their way, neither particularly memorable.”³⁾ そういうものとして見た場合、それなりの作品になってはいるが、特に記憶に残るほどではない、と幾分低い評価がなされることになる。しかし、大方の評価は次ぎの評に見られるようにほぼ好意的なものとなっている。

“Together with *French Without Tears* this is Rattigan’s best comedy.”⁴⁾

「喜劇の代表作『お日様の輝く間に』」は、「全編が機知に富んだ会話と奇抜なシチュエーションの連続で、

たえず観客や読者を笑わせずにはおかない。』⁵⁾ 正にその通りの作品で、観客ないし読者にとって大いに楽しめるものとなっているが、ここに一つ気になる指摘がなされている。

Its long-term durability could be threatened by its many allusions to the war and the extent to which so many of the jokes depend on understanding the prejudices and conditions of life in wartime London.⁶⁾

すなわち、作品の面白さが時事的な話題に頼り過ぎているとの指摘と言い換えられるであろうか。確かに、戦争中のロンドンを舞台として、主要な登場人物はすべて軍人か軍の関係者であるし、戦争や戦時下のロンドンへの言及が何度もなされるなど、いかにも当時の雰囲気満ちた作品と言えよう。しかし、この作品の本質と魅力はそのような性質のものであり、当時の詳しい予備知識なしには本当に楽しむ事ができないのであろうか。

以下、本論では、以上の点を問題として、その他の作品の特徴を合わせて検討する。

II. 人物

作品の主要人物は、イギリス人、アメリカ人、フラ

ンス人の若者とイギリス人の女性二人の五人。階級は違うが、全員軍人か軍に関係している。そして、それぞれ国の違う若者が一人の女性に求婚する。イギリス人の若者は、貴族のハーペンデン伯爵 (Earl of Harpenden) であり、話は、専らロンドンの彼のアパートで展開する。アメリカ人の若者は、アメリカ空軍の将校 (lieutenant) のマルヴェニ (Mulvaney)、フランス人の若者はコルバート (Colbert) という自由フランス軍の将校 (officer in the Fighting French Forces) で、二人ともそれぞれ休暇でロンドンにやって来た。女性の一人はエリザベス (Elisabeth)、スコットランドの公爵 (Duke of Ayr and Stirling) の娘、空軍婦人補助部隊 (W.A.A.F.) の伍長 (corporal) で、次の日にハーペンデンと結婚式を挙げる為に休暇を取ってロンドンに出て来たところであり、もう一人はメイブル・クラム (Mabel Crum)、空軍省 (Air Ministry) のタイピストでハーペンデンのガールフレンド、公爵とも付き合いがあるらしい。これら五人の男女を中心として展開するのであるが、加えて既に言及したエリザベスの父親の公爵とハーペンデンのアパートの使用人であるホートン (Horton) がいる。

少し人物について詳しく説明し過ぎたかもしれないが、これら人物の組み合わせがいかにも型にはまって喜劇的面白さを作り出している。三人の若者には、それぞれのお国柄を引っ提げて、英米仏を戯画的に代表する趣がある。

ハーペンデンは、将校の任官試験を何度受けても合格しないおよそ軍人に不向きな人物で、その原因の一つとして、彼の世間知らずがある。また、許婚の父親である公爵に、エリザベスが結婚しないとっていると聞かされても“*Oh.*”⁷⁾と繰り返すだけで、“*I thought you were a man.*” (216) とまで言われる始末である。落ち着いている、鷹揚であると言えば聞こえは良いが、翌日に迫った自分の結婚についてさえ、どうもはっきりしない煮え切らない人物となっている。

マルヴェニは、偶然酒場でハーペンデンと知り合い、彼のアパートに世話になるが、外向的で馴れ馴れしい。ハーペンデンに女性を紹介してもらったものの、たまたま来合わせたエリザベスを彼女と勘違いし、押しの一手で酒を飲ませ言い寄ろうとするが、すんでのところで勘違いに気づく。しかし、彼はエリザベスを好きになってしまう。

コルバートは、ロンドンに出てくる途中、エリザベスと同じ列車に乗り合わせて、お互いの事を話すうちに好きになり、ハーペンデンのアパートで二度目に会った時には、彼との結婚をやめるように、手を替え品を替えおかげさな物言いで説得しようとする。エリザベ

スは、ハーペンデンに恋してはいない、“*no passion, no white-hot burning of the heart*” (200) だと言ったのではないかと激しく問い詰め、メイブルの存在まで持ちだしたり、このまま結婚すれば二人の人生を破滅に追いやる事になると警告し、その後で自分が彼女に求婚する。

Turn back, Elisabeth, before it is too late. Leave this earl who does not love you to his title, his riches, and his Crums. (201)

余りの性急さを別にすれば、何とも雄弁な説得の表現ではないであろうか。彼の情熱は、少なくとも結婚を直前にしたエリザベスの気持ちを何れの方向にしる揺るがせている事が、父親の公爵が彼女が結婚をしないと断っていることを説明する言葉からも明らかであろう。

She talked a lot of gibberish about planned alliance and wrecking two lives and your not having any white-hot burning thingamagig about you—or something— (215)

これらは、ほとんどコルバートの言葉の言い換えである。

女性二人の組み合わせとその対照も際立っている。エリザベスは貴族の娘で、いかにもそれらしく、ハーペンデンと同じくらい世間知らずで、結婚式の前日になってコルバートに言われるまで、子供のときからの許婚であるハーペンデンとの結婚にほとんど疑問をもっていなかった。彼女は自分でも“*...I don't know anything about men. I've only got Daddy to go by.*” (192) と告白している。ハーペンデンに紹介してもらった女と勘違いしたマルヴェニに、無理やり酒を飲まされ、“*You have'nt any etchings to show me?*” (203) と誘いの常套文句を使って言い寄られても、男の下心に気づかない。ハーペンデンも、“*She's rather—old-fashioned—in these matters.*” (213) と彼女のことを評している。

メイブルはエリザベスとは対照的な女性で、男と売春婦まがいの付き合い方をしており、ハーペンデンのみならず公爵とも馴染みらしい。彼女がハーペンデン伯爵婦人になると思ひ込んだ公爵が、彼女に自分の会社の重役にと申し出た時、既にハーペンデンから身を引くことを決心していたにもかかわらず、彼女はそれを隠して契約を結ぶというしたたかきを見せる。マルヴェニがハーペンデンとメイブルを二人きりにして出て行こうとする時、ハーペンデンに“*And leave me alone with this man-eater on my wedding-even?*” (209) と言わせる程の女である。しかし、そのようなだらしない生活をしながらも、彼女の心根は実に包容力があり

優しい女性であることがその後の作品の展開によって明らかになる。

気は強いが上流のおぼこ娘と、出自は明らかではないにしても、したたかで手練手管に長けた庶民の女と言う組み合わせの妙であろう。その対照は、次の二人のさりげない会話にも現れている。

ELISABETH. I agree that you've never seemed to find much trouble in taking care of yourself.

MABEL. Yes. Unlike you, I had to, you see. (253)

主要人物五人に加えて、既に何度も言及しているエリザベスの父親の公爵がいる。彼はポーランド人との連絡将校 (Liaison Officer to the Poles) であり、ジッパー (Zippy Snaps) の会社を設立しようとしている。金に抜け目の無い彼は、結婚による財産契約のためにハーペンデンを訪れる。早くから鼻風を吹かせ大言壮語するが、いつの間にか彼ら若者達と一緒に賭け事に興じてしまう。以前メイブルとも関係があった遊び人らしい。彼は、事態の急変にうまく立ち回ろうとして、逆にメイブルに裏をかかれてしまうなど、どこか間の抜けた人物であり、喜劇には欠かせないお決まりのタイプと言えるであろう。

作品には、もう一人喜劇的な人物がいる。ハーペンデンの使用人のホートンであるが、これまた如何にも型通りの人物で、忠実に主人の世話をし客を丁寧にもてなす。

それぞれの人物は、いかにもステレオタイプであることは間違いない。この点は笑劇と言われる所以の一要素と考えられるが、また、一般に喜劇の人物としても不都合はないであろう。後に作家の評価を高らしめることになる「真面目な劇」においては、脇役としてしかふさわしくない人物達も、一人一人がまたその組み合わせの妙が喜劇を盛り上げている。

III. 構成

人物の次ぎには、彼らの活躍の枠組みとなる作品の構成を検討する。

舞台は、第二次大戦中のロンドン。主人公のハーペンデンのアパートの居間である。作品はIII幕で構成され、III幕だけが2場となっている。

I幕は、朝の場面。いつものように朝食を用意するホートンであるが、客を巡っての彼とハーペンデンとのやり取りから、女遊びに興じるハーペンデンの日頃の暮らしぶりがさりげなく示される。客はマルヴェニで、ハーペンデンの留守の間滞在することになり、彼の女友達のメイブルを紹介してもらおう。ハーペンデン

が任官試験を受けるため、海軍本部 (the Admiralty) に行く準備をしているところにエリザベスがやってくる。いざ出掛けようというところに、今度は公爵の訪問。次いで、エリザベスが列車で乗り合わせ、宿泊先としてハーペンデンのアパートを紹介したコルバートも現れる等、遅れそうになって焦るハーペンデンと彼を引き留める出来事の連続が格好の見せ場を作っている。その後でコルバートのエリザベスへの言い寄りの場面、次ぎには勘違いしたマルヴェニがエリザベスに酒を飲ませ迫る場面へと一気に進み、娘を迎えに来た公爵の再登場で終わる。

II幕はその日の夜11時頃。メイブルとマルヴェニのいる所にハーペンデンが帰って来て、翌朝の結婚式の話や任官試験失敗のこと等を話す。マルヴェニは朝出会った女性に夢中であり、メイブルはメイブルではっきりとハーペンデンへの好意を口にする。彼は彼女に手切れ金を渡す。公爵が来て、エリザベスが結婚しないと伝えていることを伝える。その原因らしいマルヴェニと、そこへ登場したコルバートで、とうとうエリザベスを巡って三つ巴の状態が出現する。それまで一番の関係者でありながら、実に落ち着いているように見えたハーペンデンが、電話で抜け駆けをし、エリザベスに訳を問い質すとともに、二人のことを“a vicious French snake” (227) とか“a lecherous American” (227) 等と悪し様に言う。三人は、それぞれ彼女に会いに行きプロポーズをする事に決まり、その順番を決めるためサイコロゲーム (craps) を始める。そこへ公爵がやって来て、次第にゲームに夢中になる。

III幕1場は、II幕に続く早朝の3時頃。公爵とハーペンデンはゲームを続け、コルバートは近くにいる。マルヴェニが最初にエリザベスに会いに出掛けてから4時間近くになる。エリザベスのホテルに電話をしたハーペンデンが、二人が公園かどこかへ外出しているらしいことを伝え、エリザベスの相手はマルヴェニだとの暗黙の了解が生まれる。そろそろ寝ようという時に、ハーペンデンは、突然メイブルに求婚し彼女も承諾する。ところがそこへエリザベスとマルヴェニが現れる。二人は穏やかに別れを告げる。エリザベスの気持ちちがようやくハーペンデンに向かったという時になって、それと知らないハーペンデンは、皆にメイブルと結婚すると言う。憤慨した公爵とエリザベスは帰り、残った男たち三人は寝る。

III幕2場は、翌朝の10時頃。I幕と同様の場面が始まる。公爵がやって来て、メイブルに自分の会社に重役として加わることを提案し契約が成立する。メイブルはエリザベスを呼び出し、ハーペンデンとの結婚をやめると言う。続いて彼にもそのことを告げ、後は、

結婚式に行くための準備のゴタゴタでめでたしめでたしとなる。

ここまで詳しく述べて来たが、特にこの作品の構成がそれ程巧みだとか緊密だとかは言えないであろう。主役であるハーペンデンとエリザベスの関係を中心にみると、I幕では、結婚式を翌日に控えてどうもはつきりしないハーペンデンとエリザベスの二人に対して、マルヴェニとコルバートという横槍が入り、成り行きに不安と期待が生まれる。II幕は、エリザベスを巡って男たちの三つ巴の関係が表面化し緊張が生まれ、誰が先にプロポーズするかも含めて、これまた成り行きを楽しみにして待つことになる。III幕1場では、エリザベスはマルヴェニを選んだと考えられ、自棄を起こしたのか、ハーペンデンは、メイプルにプロポーズして結婚の約束をするのだが、実は、エリザベスはハーペンデンを選んでいて、どう考えても、ハーペンデンとメイプルの組み合わせに納得しかねる観客乃至読者にとって、やはり新たな解決が待たれる。そして最後のIII幕2場で、メイプルの思いがけない粋な計らいでハーペンデンとエリザベスは再び元のさやに収まり、幕となる。

それぞれの幕と場において、それなりの展開の驚きとサスペンスがあり、最後には、なるようになったという満足感がもたらされる。全体として平凡ながら工夫された構成になっていると言えるであろう。

IV. 会 話

そしてこの作品において最も面白く魅力的なのが、本論の始めに言及した機知に富んだ会話であろう。どこを例として取り上げるまでもなく、作品の初めのハーペンデンとホートンの会話から最後の頁のそれまで、文字通り全編が楽しめ笑えるものとなっている。

この会話の中に、確かに、戦争や戦時下のロンドンへの言及が頻発する。先ず軍関係の名称とか階級を表す用語がある。登場人物のほとんどが軍人か軍関係者であるから、それらの用語が出てくることは極めて自然であろう。それらは既に人物の説明の時にその大部分をあげているのでここでは繰り返さない。その他、“searchlights”、“black-out”、“court-martial”、“a little international arbitration”、“sirens”、“gas-mask”等。ハーペンデンが、エリザベスのいるところでメイプルに電話をする場面も、彼女に気づかれないように用件を伝えようとして軍隊式の話振りをしているのも笑えるであろう。

I see that you've taken no steps to expedite delivery...Yes, I'm glad of that...Well, the fact is

that something has come up that renders the immediate project temporarily inoperative... (194)

そのような言い方で印象的な一連の表現がある。先ずI幕の後半でマルヴェニがエリザベスに酒を勧める場面であるが、彼は、“Here's to Anglo-American relations.”(203)と乾杯の言葉を言う。本来なら戦争遂行のための英米の同盟関係を意味する言葉であるが、彼はそれをエリザベスと自分の関係に置き換えて使っている。2杯目の乾杯には、“Now...here's to even closer Anglo-American relations. (204)”とエリザベスを自分のペースにどんどん引き込んで行く。II幕では、ハーペンデンがマルヴェニに対して、同様の言い方をして、自分たちイギリス人の結婚式でアメリカ人が花婿付き添い人になることは両国にとって素晴らしいことだと主張する。ところがIII幕では、エリザベスが、マルヴェニにたいして同じ表現を使っている。彼女は、マルヴェニの恋人に自分のことが誤解されてはいけないという意味で、どうもマルヴェニが以前にその表現を使った時の事をからかう気持ちで言っているように思われる。国と国との同盟関係を表す大きな言葉を、個人的な小さいな事に使っているのであり、言わば卑小化とも言えば良いであろうか。

V. テーマ

さて、笑いの要素ばかりが濃厚なこの作品に、テーマのようなものはあるのだろうか。一つには風刺ということが考えられよう。英米仏それぞれを対比しての国民性の戯画化については既に述べた。「真面目な劇」にはふさわしくない人物造形ではあるが、喜劇においては、それなりに効果的であり、面白くもある。

“Americans always fall for the obvious. They don't appreciate subtlety.”(209)と言ったメイプルの辛辣な指摘もある。エリザベスはどうやらマルヴェニを選んだらしいと考えたコルバートは、ハーペンデンに言う。

My friend, you should not bear me a grudge. We must both acknowledge that America has conquered us. (236)

彼の言うアメリカとは、勿論マルヴェニの事である。一方で、彼の早とちりのせいで、早まってメイプルに求婚したハーペンデンは、マルヴェニとともにその怒りをコルバートにぶつけようとする。その時のコルバートの言葉は、“I see I am faced by the Anglo-Saxon bloc.”(248)であった。作品の随所にこのような表現が散りばめられて、国民性の比較をさせるような仕掛けとなっているようである。

風刺と言えば、ハーペンデンやエリザベスに見られる世間知らずの貴族階級の間人もその対象となっている。それには如何にも貴族的でありまた俗物的でもある公爵も例外ではない。マルヴェニやコルバートは、貴族階級の没落して行く運命について話題にしている。しかし、一方では、貴族階級の零落を笑う彼ら軍人にしても戦争が終わればたちまち同じ運命が待ち構えている。平時に戻れば軍隊は無用の長物と化してしまう。作品は、貴族階級のみならず軍隊、軍人をもその風刺の視野に入れている。

作品のテーマとして、主役二人についてはどうであろうか。ハーペンデンとエリザベスは親の決めた許婚であった。そのためであろうか、どうも二人の気持ちのはっきりとしていない。結婚式前日になり、マルヴェニとコルバートと言う競争相手の出現によって、初めて、二人の関係は動きを見せる。もっとも、エリザベスの場合は、その前からある程度二人の関係について考えていたことが、例えば、列車で乗り合わせたコルバートに語っていることからわかる。単なる結婚前のマリッジ・ブルーとは言えないのではないか。しかし、何れにしてもその問題と正面から向き合うのは、マルヴェニとコルバートの存在によってであることは間違いない。

ハーペンデンの場合は、もっといい加減のように思われる。相変わらずメイブルとも付き合い、エリザベスの気持ちや他の男に奪われたと思った時には、突然メイブルに求婚する。彼はその理由をメイブルに問われるままに答えている。

MABEL. Why?

HARPENDEN. Because I love you very much.

MABEL. Why else?

HARPENDEN. Because we get on well together,
and I think you'd make me a very good wife.

MABEL. Yes, darling. Why else?

HARPENDEN. Because if I don't marry someone
this leave I'm going to get into trouble with
my Captain. (240)

二つ目まではいいとして、三つ目は冗談でなければ余りにも子供じみている。

彼の本気が少し見られる時もある。三つ巴の状況が明らかになって、それまでは泰然自若として、実に落ち着いた見えたハーペンデンが、電話で抜け駆けをし、エリザベスに訳を問いただすとともに、二人のことを急に悪し様に言う。これまた子供じみていると言ってもいいかも知れないが、少なくとも真剣になって、自分から対処しようとしている現れではないか。それはまた、軽率ではあるが、メイブルへの求婚にも同じこと

が言える。マルヴェニの帰りを待っている時の彼の苦しみは、喜劇の、少なくとも笑劇の主人公のそれを越えているように思われる。

二人は、結婚の前日になって、外部からの力によってではあるが、初めて事実と直面し、様々に苦しみ悩むことを通してようやく愛情を確認し、結婚に望むことができたといえるであろう。

ハーペンデンとエリザベスの結婚には、メイブルの助けが大きく関わっている。ハーペンデンを好きな気持ちは十分で、彼の求婚を一旦は受け入れるものの、ハーペンデンが、実はエリザベスを愛していることを見抜き、身を引くことを決心する。しかもエリザベスと呼んで、“Auntie Mabel will fix it.”(254) と、二人の仲を取り持つことさえ行っている。彼女は、エリザベスを説得するために、

MABEL. What I'm saying is, I'm a trollop—let's
face it—but not for money.

ELISABETH. What for, then?

MABEL. Men. (253)

等と自分を貶めるようなことを言っているが、本心ではないであろう。彼女は、身持ちの悪い女ではあるが、心根は優しく包容力があり、何よりも現実を見据える目と自己犠牲の勇気を持っている。彼女は、後の作品、例えば、*Separate Tables* (1654) におけるMiss Cooperのような女性の系譜に連なる存在であると言える。

後の作品との関連で言うなら、ハーペンデンとエリザベス、そしてメイブルにも見られたし、意外な人物ではあるが公爵の口からも言われる“we must face facts”(196) ということが注目される。それは、事実と直面する、正面から向き合う、更にはそれに対処しようとするのである。後には、それは作品の中心的なテーマとして取り上げられることになる。この作品においては、その萌芽が見られるという段階と言える。

VI. おわりに

機知に富んだ言葉のやり取りの中に、戦時への言及が確かに多く存在する。灯火管制や英米の軍事的同盟関係を指すのにもそれは典型的に見られるが、後者のように、ある大きな表現を、別な文脈で別の目的で卑小化して使い面白みを醸すのは、別に時代の状況に関わらずあることで、それを楽しむのに大した予備知識は必要ないであろう。別の見方をすれば、それは、作品に具体性や現実味を与えているとも言えよう。登場人物のほとんどが軍人か軍の関係者であるということでは、共通の話題が、初めて出会った人物間に話を弾

ませ、それぞれの人物を浮かび上がらせる手助けとして効果を上げていると考えられる。

主要人物の一人であるハーペンデンが、没落する運命にある貴族階級に属していると何度か言及があり、本人もそれを認めている場面があるが、それを指摘する軍人も、実は、戦時下でこそ脚光を浴びる存在であるが、戦争が終われば言わば無用の長物と化す運命にあるとしたら、その指摘は何とも皮肉な響きが生じないだろうか。英米仏それぞれの国民性に対する戯画的風刺とともに、貴族階級や軍人の存在とその営為への風刺としても興味深い点であろう。

この作品を楽しむために、どの程度の予備知識が必要であるか、簡単には決められないであろうが、少なくとも、作品が、何れかの時代、何れかの場所を舞台に設定されれば、必ず同じような問題が起こってくるであろう。全体として判断を下すとしたら、この作品の場合は、予備知識の多少は、作品中の多くの言及にもかかわらず、それほど問題とはならないと考えられる。いつの時代にあっても、笑劇風喜劇として気楽に楽しめる作品であると結論されよう。

喜劇的才能は、この作品の時点でも十分に証明されている。人物の造形において、型を捉えて描き出すこともできたが、心の内面の苦悩や葛藤、それを経て如何に人間が変われるかの表現はこれからを待たねばならない。作品毎に新しい面を見せてくれる作家故の期待と言えるであろう。

注

1) Harold Bloom (ed.), *The Chelsea House Library of Literary Criticism: Twentieth-Century British*

Literature, vol.4 (Chelsea House Publishers, New York, 1987), p.2359.

2) 笑劇 (farce) については、以下のような説明が見られる。

A form of comedy that relies principally on artificial contrivances of plot and the exploitation of comic situations, rather than on characterization, wit, or other more intellectual elements. Farce is a popular comic form with broad appeal, for it makes us laugh while asking a minimum expenditure of cerebral effort. Jack A. Vaughn, *Drama A to Z: A Handbook* (Frederick Ungar Publishing Co., New York, 1978), p.80.

これに従えば、入り組んだ筋立てや喜劇的な状況の駆使は当てはまっているが、人物や機知や知的な面が軽視されているという点において、この作品を笑劇と呼ぶには少し無理があるように思われる。

3) T.W.Craik (ed.), *The Revels History of Drama in English*, vol.7 (Methuen & Co Ltd, London, 1978), p.226.

4) Michael Darlow & Gillian Hodson, *Terence Rattigan: The Man and His Work* (Quartet Books, London, 1979), p.123.

5) 荒井良雄「ラティガンの戯曲」『ラティガン戯曲集』(原書房、1967) pp.286-287.

6) Michael Darlow & Gillian Hodson, p.123.

7) Terence Rattigan, *The Collected Plays of Terence Rattigan*, vol.1 (Hamish Hamilton, London, 1960), p.43.以後、作品からの引用は全てこの版を使用。引用文の後の括弧に頁数のみを記す。